

シンポジウム／語りと伝説―三河の浄瑠璃姫伝承―

## 鳳来山と浄瑠璃姫伝説

小林 幸夫

大学で愛知の芸能を講じて、『浄瑠璃姫物語』をいくたびか読んできた。そのたびに三河岡崎や鳳来寺山周辺に残る伝説が気になって、目についた資料を気ままに集めてはきた。しかし、片手間にやっていることもあって、はかのいく仕事ではなかった。日本口承文芸学会の例会を引き受けるにあたって（東海学園大学・二〇〇八年三月）、この機会に浄瑠璃姫の伝説をテーマにして、シンポジウムを企画してみようかと思いついた。中部地方で行うのだから、せめて愛知ゆかりの口承文芸を取りあげてみたかったのである。伝説を道案内として、浄瑠璃姫の物語にできるだけ関心をもってらおうと考えて始めた講義なのだが、学生はあまり浄瑠璃姫に関心がないらしい。中世以来の語り物であれ、近世このかたの伝説であれ、口承文芸にも郷土の歴史は刻まれていますよ、と話しかけてみても、あまり興味を示さない。昔話だけではない、伝説もまた、現代の学生には縁遠いものになったのだろうか。それを思うと何やら口惜しい。

そこで「語りと伝説―三河の浄瑠璃姫伝承―」と銘うって、浄瑠璃姫伝説について考える機会にしよう、と、まるでひとり相撲を取るようになって準備を始めた。

ついでに専門家でなくてもいい、地元で居て、身近に伝説を聞いて育った方に話を伺いたい。絵巻も含めて、語り物芸能について語っていただくのもよからう。浄瑠璃姫の伝説は、寺院の略縁起として伝えられてきたのだから、近世唱導のことも視野に入れておこう。こうして深谷大さんと堤邦彦さんの二人に講師をお願いした。

ところが地元の方を探すのに難渋した。つてを求めて探しても適任者が見つからない。地元でも、浄瑠璃姫のことは忘れられているらしい。何やら寂しい気もした。そこで岡崎市役所の市民文化部を訪ねて、適任者がおられれば、紹介していただきたいとお願いした。そこで名前の挙がったのが加藤善啓さんである。

※ ※

日を改めて岡崎市に加藤さんを訪ねると、驚いたことに資料を用意して待っていてくださった。加藤さんは郷土史家ではない。岡崎呉服協同組合理事長という肩書きを持つ呉服屋さんである。居間には義経と浄瑠璃姫の人形が飾られていて、私を出迎えてくれた。この人形は市に寄贈されて、新しいホールが完

成次第、そちらに移されるのだという。その人形を前にして私たちの浄瑠璃姫談義は始まった。

市役所の方から、近松門左衛門の「浄瑠璃十二段」の復曲に尽力された方がおられるので、話を伺ってみては、と勧められた。それが加藤さんである。その次第をここに手短かに述べておこう。

平成十四年、「岡崎きものサミット」開催にあたって、浄瑠璃姫の衣装（十二単衣）を制作しよう、という企画を立てられ、京都西陣織工業組合の協力を得て製作が始められた。翌十五年には、義経の衣装製作も決まった。この事業は、浄瑠璃姫による岡崎の地域振興という意図もあったのだが、決して思いつきではなかった。子どもの頃、父親から親しく浄瑠璃姫の話を聞かされてきた加藤さんの体験が、根っこにあつて進められてきたのである。浄瑠璃姫への愛着が、この企画を進めた人たちに共有されていたのである。平成十六年、衣装を着せる人形を作ろうという話になって、これも知立市山車文楽の協力を得て、義経と浄瑠璃姫の二体の完成を見る。さらに加藤さんたち呉服組合の方々の熱意は、文楽の七世竹本住大夫師をも動かして、近松「源氏十二段」の床本から素語りを再現し、平成十六年十月、岡崎にて「三段目」上演。平成十八年十月には、四段目・五段目を上演することとなる。そして平成二十年二月には、第二十九回岡崎市民音楽祭が行われ、文化庁・岡崎市の主催で「源氏十二段」が上演された（岡崎市せききいホール）。ここに

到るまでの苦心は、加藤さんが自ら筆を執って、「文楽「浄瑠璃姫物語」の復刻に向けて」（『岡崎文化』二十八号）という一文を残しておられるので参照していただきたい。

※ ※

浄瑠璃姫について語る加藤さんの口調は、次第に熱を帯びてきて、相槌をうつ私に意見を求められるのだが、気圧された私はただ拝聴するだけだった。加藤さんの浄瑠璃姫への関心は、郷土岡崎への愛着にまっすぐにつながっている、ということにはつきりと伝わってきた。

加藤さんは、なぜ矢作が『浄瑠璃姫物語』の舞台なのか、という自らの疑問から始めて、鎌倉時代以来、三河守護職を務めてきた藤原南家の歴史を語り、源頼朝から徳川家康までの源家将軍と三河地方のゆかりの深さをたどられる。三河は歴史の枢要なる舞台であったのだ。それだけではない。加藤さんにとっては、伝説もまた三河の歴史を語るものとして意味をもつ。たとえば源義朝の正室にして頼朝の母である由良御前。三河を在所とする彼女は、悲劇の英雄義経の恋人浄瑠璃姫になぞらえることができるのではないか、こう加藤さんは考えられる。源家の歴史が三河から始まるように、源氏の御曹司の物語も、ここ三河から始まって、浄瑠璃姫と義経の悲恋が、矢作の宿を舞台として語られるのである。

加藤さんは、源家譜代の地三河と徳川の因縁を、家康が峯の薬師の申し子であるという伝説の中にも読みとられる。家康の母が峯の薬師に祈念したところ、その夜、霊夢の告げあつて、懐妊したという（徳川幕府家譜）。このようにして伝説にも、鎌倉以来、徳川に到るまでの三河との深いゆかりを感じとられるのだ。その歴史があつてこそ、『浄瑠璃姫物語』は、三河矢作に生まれたのである。資料をたどりながら、話をもっと細部にわたったのだが、それを紹介する余裕がない。改めて例会の折に配布された懇切な資料を参照されたい。

※ ※

ここからは私の関心事をひとつだけ述べることにする。峯の薬師鳳来山寺のことである。鳳来寺は長享三年（一四八九）頃までは天台の山であつたが、戦国の世になつて変化が生じ、江戸初期までには天台の勢力は衰退して、本堂薬師堂を拠点とする真言宗僧徒が主流を占めるようになっていた（「鳳来寺開山千三百年」発行・鳳来寺）。このように真言・天台両宗の僧侶が混在して、そこに修験道・山伏がかかわる複雑な様相を呈していたのが鳳来山であつた。そして何よりも宗派を超えた霊場であつた。祖霊のこもれる山にして、死者供養の霊山とも仰がれた鳳来山の歴史は、『浄瑠璃姫物語』を読むとき、やはり見逃がすことはできない。

古代以来、修験道の山として開かれ、山岳信仰の霊地であつた鳳来山は、山中に写経經典を納めた経筒が埋納され、納骨が行われてきた。昭和四十一年、山頂から延びる南の尾根に鳳来寺鏡岩下遺跡が発掘されて、骨壺・鏡・経筒外套など多数の出土品が発見された。時代は平安時代から江戸時代にまで及ぶのだが、そこから中世の墓群の存在が確認されたのである（「鳳来寺開山千三百年」）。ここは天台・真言の両宗が並びたつ、滅罪・浄土往生の山であるとともに、修験道の霊場として死者の魂が赴き、鎮まる所であつた。祖霊の赴くところ、そこを霊場として死者供養が行われてきたといつていい。標高六九五メートル、けつして高山とはいいがたいが、三河の人々に宗派を超えた霊山として仰ぎ見られてきたのである。

浄瑠璃姫は鳳来山の笹谷で最期を迎え、五輪塔を建てて供養される。法華経読誦ののち、義経が姫の靈魂と和歌を詠み交わすと、五輪塔が砕けて散る。折しも四十九日の法要の時であれば、この「五輪砕き」のくだりは、姫の靈魂の鎮まりと成仏を示すものとして、聴衆に深い印象を刻んだにちがいない。「五輪砕き」を末尾にして閉じられるのも、死者供養の山を舞台とする物語にふさわしい。

創建の時代は明らかではないが、鳳来寺には古くから鏡堂があつて、多くの鏡が寄進されてきた。それらが「薬師の鏡」として尊崇されたのは、一切衆生の善悪の願望を映し出すからだという。本尊薬師の姿がこの鏡に浮かぶとき、「利益冥応セリ」

と信じられた(「鳳来寺興記」鏡の事)。鳳来山に詣でる者は、本尊の仏前に鏡を奉納し、鏡岩から谷に鏡を投じて、所願成就を祈ってきた。罪を鏡に移して、穢れを捨てたのである。それは死者供養の行ないでもあった。『浄瑠璃姫物語』には、子種を祈って本尊薬師にあまたの宝物を寄進するくだりがある。その中に「八花形の唐の鏡」が数えあげられるのも、もとは相応の意味があったのかもしれない。明治維新以前、山内坊中の岩本院で、正月十四日の田楽祭りの折、浄瑠璃姫の「姿見の鏡」を拝観させたというのも、おそらく鏡の信仰と結びついた宣伝活動といつてよい。浄瑠璃姫の形見の鏡を示して、衆病悉除の現世利益が喧伝されたのかもしれない。

※ ※

改めて紹介するまでもないが、早川孝太郎は「足袋の濫觴」を語る伝説を書き留めている(「猪・鹿・狸」)。兼高長者が薬師堂に参籠すると、満願の夜の夢に、薬師が大いなる鹿と頭れて、子種を授けたという話である。しかし、これも霊験譚として当たり前のように受けとめているが、なぜ薬師が鹿と形を変えるのか、ということを考えてみてもよい。すでに柳田国男は「鹿母夫人」の故事をあげているが(「桃太郎の誕生」)、それだけではどうだろう。もう少し、鳳来山という土地に寄り添って考えてみるのもよからう。

『猪・鹿・狸』を読むと、鳳来山一帯は、絶好の鹿の狩り場であったことがわかる。鹿がこの山に群棲していた時代があったのである。三河鳳来山麓に暮らす人々は、狩人として鳥獣を追い、木地師として材木を削り、炭を焼いて暮らしをたててきた。彼らにとつて鹿は、山の神の使いであったと思われる。同じ本で早川は、鳳来寺の西南方、本宮山にある国幣小社砥鹿神社の口碑を記録している。ある時麓にすむ狩人が鹿を追って山中に分け入ると、一頭の眠れる大鹿を見つけた。矢をもって射んとしても、手応えはない。鹿と見えたのは大いなる砥石であった。神意を感じた狩人は、砥石を神と祀ったという。「足助八幡宮縁起」にも、鹿は「砥鹿大菩薩の化現」なりとあるのを考えあわせれば、鹿は神の使わしめなのである。今くわしく述べる余裕はないが、鳳来山寺と砥鹿神社の縁起は、利修仙人の開創譚を初めとして、極めて類似し、共通部分が多い。何れの縁起も、おそらくは本宮山や鳳来山に暮らす山の民、狩人・山伏の伝承に基づいて作られたのであろう。

薬師が大鹿と姿をかえて現れる鳳来山の伝説は、山に鹿を追って暮らす人々の実感から生まれたのであろう。伝説の生まれた時代を特定することはできないが、この話が、山に暮らす狩人たちの伝説であったとすれば、『浄瑠璃姫物語』の語りとのようにかわりながら山村に伝えられてきたか、それを考える貴重な材料とはなるだろう。

※ ※

同じ書物で早川は光明皇后誕生譚を紹介している。これも周知のことであるが、利修仙人が煙巖山の岩窟で修行中、尿意を催して傍らの薄に放尿したところ、雌鹿が来てその薄を舐め、たちまち孕んだという。その子が成長して光明皇后になり給うたと伝えている。この口碑もすでに鳳来寺の縁起「鳳来寺興記」（慶安三年・一六四八写本）に見えていて、これに加えて癩者への湯施行のことが語られている（「光明皇后の事」）。さらに縁起は鳳来寺の「巫女石」や「厄行道」の伝説を載せているのだが、これらはいずれも比丘尼の運んだ伝承のように思われる。本堂の北西にある巫女石は、利修仙人の説法を聞きに、天より八人の巫女が天降ってきた場所である。鳳来山が死者供養の霊場だったことを思えば、この伝説は、死穢をきよめ、死霊の鎮魂をつかさどる比丘尼のいたことを語るのだろうか。また厄行道は、仙人を訪ねて来た尼が、面会を拒絶されたのに怒り、高い岩山に登り放尿したところ、岩が砕けて谷に転落した場所という。ならば厄行道とは、女人結界の場であったと思われる。いずれにしてもこれらの伝説は、かつて鳳来山にあった比丘尼の活動の跡を思わせる。

義経という英雄の偉業の蔭で、悲しい最期を遂げた姫と、彼女の死を看取って墓守を務めた冷泉の物語は、俊寛の最期を見届けた有王のそれに見合っている。とはいえこちらは女性の語

りの性格が際だっている。「浄瑠璃物語」を、姫の霊を鎮める供養の物語とすれば、その末尾の「五輪砕き」は、姫の最期を伝える女語りのあったことを思わせる。

天明元年（一七八一）、横山村の村人が、笹谷に浄瑠璃姫の祠を建てた。この祠には後日譚がある。明治三十年頃、早川熊十という男の夢枕に浄瑠璃姫が現れて、自分を信仰するならば、すべての願いを叶えようと告げた。以来、笹谷の祠に参詣者が殺到したという（早川孝太郎「三州横山話」）。新しく作られたわいもない伝説として、笑ってすますることもできる。しかし、鳳来山麓に暮らす人々の中に、浄瑠璃姫の信仰は、現世利益をもたらずものとして、明治の頃まで確かに生きていたことを、右の伝説は示している。さらにいえば、ここ笹谷で悲しい最期を迎えた浄瑠璃姫の霊が、村人の口を介して託宣することは、それほど遠くない過去にもあったのである。時代をさらに遡れば、それは神仏に仕え祀る遊行の女性の職掌であった。

細部を省略したので、ずいぶん大雑把な議論になってしまった。「浄瑠璃姫物語」を、鳳来山とそこに残された伝説を介して読んでみようかと試みただけである。それにしても取りあげた伝説が少なすぎる難がある。論ずべき課題は、まだいくらかもあるのだが、紙数が尽きたので、ここで綴じ目とする。

（こばやし・ゆきお／東海学園大学）